

6. むすび

地震調査研究推進本部による、「今後の重点的な調査観測計画について（－活断層で発生する地震及び海溝型地震を対象とした重点的観測、活断層の今後の基盤的調査観測の進め方－）」に基づき、平成17年度から、糸魚川－静岡構造線断層帯における重点的な調査観測が5ヵ年計画で始まった。

第3章で述べたように、平成18年度の調査観測も、前年度に引き続き順調に進行している。反射法地震探査・重力探査、電磁気探査及び自然地震観測（稠密アレー観測）は、本調査観測の重要課題である諏訪湖付近のセグメント境界の構造解明に着手した。これまでの結果によって諏訪湖付近における構造線北部及び南部の構造の連続性について新たな知見が得られつつある。これらの調査観測は、その成果を相互利用し、また統合的解析が可能なように計画・実施されている。現段階では、各項目毎に解析が進行中であるが、今後の解析の進展によって、各調査から出された断層帯のイメージの対応関係が明らかになり、断層帯の形状とともにその物性的特徴が明らかになると期待される。自然地震観測（長期機動観測）においては、観測点新設が順調に実施されており、従来の定常観測網に較べて稠密なデータが集積しつつある。これらのデータについて広域的なトモグラフィ解析も行われ、構造線に沿った構造の違いがより明瞭な形で明らかになりつつある。また、国土地理院による構造線断層帯周辺におけるGPS及びSARによる地殻変動観測によって、構造線及びその周辺域の変形様式が明らかになりつつある。これらの結果は、他の観測項目の結果と併せ、この構造線における歪・応力の集中プロセスを解明鬆上で重要な役割を果たすと期待される。

また、変動地形調査では、航空写真測量や現地地形調査によって精密な累積変位量および平均変位速度分布を求める調査が順調に行われている。この知見は、この断層帯の変動地形学的特徴の詳細な解明に貢献するだけでなく、強震動予測に必要な断層変位量（アスペリティ分布）に対して重要な拘束条件を与えるものである。

強震動評価高精度化のための強震観測・地下構造調査においては、探査データの収集とともに、既往成果まで含めて松本・諏訪・長野盆地の構造モデル構築が開始された。前々年度に設置された強震観測点におけるデータ収集も順調に推移しており、当該域の地盤特性の詳細が明らかになるであろう。